



明治学院大学機関リポジトリ
<http://repository.meijigakuin.ac.jp/>

Title	「19世紀アメリカ・リアリズム文学」の行方 W.D.ハウエルズをめぐって
Author(s)	石渡, 周二
Citation	明治学院大学教養教育センター紀要 : カルチュラル = The MGU journal of liberal arts studies : Karuchuru, 3(1): 67-73
Issue Date	2009-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10723/3198
Rights	

「19世紀アメリカ・リアリズム文学」の行方

— W. D. ハウエルズをめぐる —

石 渡 周 二

南北戦争後のリアリズムの登場とその勃興は、19世紀のアメリカ文学を論じる際に必ず持ち出されることがらであるといっている。それは大づかみにリアリズム運動として認知されていて、その先頭に立ったのが William Dean Howells (1837-1921) であり、そして主要な作家として Mark Twain (1835-1910) と Henry James (1843-1916) がハウエルズの名とともに語られる。少なくとも、標準的な文学史の教科書ではそうした記述がアメリカ文学の常識として考えられているのはたしかである⁽¹⁾。しかし、こうした19世紀アメリカのリアリズム文学をめぐる言辞にはつねにある種の居心地の悪さともいうものがある。ままとっている。

トウェイン、ハウエルズ、ジェームズの3人はいずれも1830年代から40年代の間に生をうけ、1880年代に後世に名を残す作品を書いている⁽²⁾。ところが、3人の共通点はそこで終わりである。この作家たちは友人、少なくとも知人同士であったことは確実だが、その作品は創作の世界ではお互いに別の世界の住人であることを如実に示している。ピカレスク小説に似て、奇想天外・自由奔放なエピソードを重ねながら、圧倒的な存在感を示す『ハックルベリー・フィンの冒険』と、動きのない、内面の劇を重厚な文体で書きあげた『ある婦人の肖像』に共通するのは、ともに英語で書かれているということだけである。3人を「リア

リズムの作家」としてひと括りするのにはかなりの無理がある。また、「リアリズム運動」にしても、文学運動と聞いて思い浮かべるような現象が南北戦争後のアメリカに起こったわけでもなかった。ハウエルズとジェームズの交遊は少なくとも1860年代半ばに始まり、公私ともに、ということは文学との関わりにおいても、世紀を超えて後者が亡くなるまで持続したが、ハウエルズの「リアリズム」に対してジェームズが異議を唱えていたのは周知の事実である⁽³⁾。また、トウェインはハウエルズとの間に作家と編集者の関係以上の交わりをもったが、トウェインがハウエルズのリアリズム理論に対して示した理解とまで言わなくとも、関心の程度がハウエルズ自身の望んでいたものであったかどうかは疑問がある⁽⁴⁾。ジェームズとトウェインも1879年以来、知己だったことが確認されている。ところが、この時代、生活の必要もあって盛んに書評や評論をものにしていくジェームズにトウェインの作品にふれた文章はない。

19世紀アメリカの「リアリズム文学」を語るときの居心地の悪さは、「アメリカン・ルネッサンス」の時代を語っていたときの素朴な疑問に似ているのだろう。1830年代から50年代に主要な作品を発表している Emerson をはじめ、Thoreau, Hawthorne, Melville, Whitman を論じた F. O. Matthiessen の大著 *American Renaissance* (1941) に由来する言葉だが、「アメリカ文学の再

生」というのであれば、滅亡・衰退してしまった時期がアメリカ文学の歴史になければならないが、植民地時代から数えてもわずか200年余りでしかない当時、「再生」を云々するほどの歴史はない。「アメリカン・ルネッサンス」は現在、1830年代から南北戦争前の文学を呼ぶために便宜的に使われる通称であり、意義があるとすれば「アメリカ文学の再生」ではなく、「国民文学の創造」を指すことが明確にされている。「リアリズム文学」にも同様の吟味が必要とされているようだ。19世紀アメリカ・リアリズム文学で明らかなのは、ハウエルズが「リアリズム」をアメリカ文学の中に植え付けようとし、論陣を張ったということである。ハウエルズがこの「リアリズム」をいったいなぜ持ち出したのか、この問題を19世紀アメリカのリアリズム文学を再検討する手がかりとして探してみたい。

ハウエルズの生涯は、そのまま南北戦争後の時代に起こったアメリカ人の広範囲に及んだ社会的移動と多くの点で重なっている。この時代、アメリカは都市国家への道を辿っていたが、ハウエルズも段階的に大きな都市へと移り住んでいった⁶⁾。1837年、オハイオ州マーティンズ・フェリーで生まれると、新聞記者・経営者の父に従ってオハイオ州の小さな村や町を転々としながら成長期を過ごした後、次第に大都会へ引かれていった。まずはオハイオ州のコロンバスとシンシナティ、そこから北西部を経てボストンへ行き、そしてニューヨークへ移り住んだ。アメリカ人を大きな人口を抱えた都市へ駆り立てたのは経済的動機だったが、ハウエルズも同様で、新聞記者としてより良い仕事を求めて移動していった。1856年にコロンバスに移ったのは『シンシナティ・ガゼット』紙の政治記者として働くため、翌1857年にはシン

シナティで同紙の社会部デスクになっている。1858年にはコロンバスへ戻って、『オハイオ・ステート・ジャーナル』紙で働いた。1861年、リンカーン政権による政治任用によって駐ベニス領事となり、4年後、帰国するとニューヨークで『ネイション』誌の編集部に入った。1866年には『アトランティック・マンスリー』誌の副編集長に就任するためにボストンに移っている。ニューヨークが出版界の中心地となり、有力な出版社の根拠地となると、ハウエルズは1888年以降、ニューヨークで過ごすことが多くなり、1891年からはニューヨークに住いを定めて1920年に死去するまで、時おり海外にでる以外はそこで暮らした。

こうして見ると、ハウエルズは19世紀後半にアメリカで生活をしてきた多くの人々と同じように大きな移動の波を受けて行動しているが、その行動を細かく見てみると異なる点があり、その意味は大きい。ほとんどのアメリカ人と違って、移動を重ねるうちに、ハウエルズは新聞記者から作家・批評家として大成し、アメリカの文化の一断面にかなりの影響力を持つまでになっている。例えば、南北戦争が戦われている間、ハウエルズはリンカーン政権から政治任用を受けて領事として国外にいた。それまでにハウエルズは『サタデー・プレス』や『アトランティック・マンスリー』などに詩を再三掲載することに成功していたが、重要なのはリンカーンの選挙用の伝記を執筆したことだった。これには共和党員だったオハイオ州知事からの推薦があったからだが、ハウエルズ自身もリンカーン側近で詩人である John M. Hay が自分の詩に親しんでいることを知って、ヘイ宛に書簡を送って重ねて依頼をしている。このベニス領事への任命はハウエルズにとって成功するための出発点となった。ほとんど名誉職に近い立場を利用して、イタリア各地、ヨーロッパの都市を歴

訪し、「ベニス便り」の類の文章をボストンの新聞に寄稿する一方で、ヨーロッパ文芸に対する造詣を深めていったが、これによって帰国したときにはアメリカの文学界で新進の作家として、しかも「ヨーロッパ通」のおまけがついたハウエルズの名が確立され、成功への踏み台にたったのである。このエピソードはハウエルズの政治的手腕と野心を余すところなく示している。「金ピカ時代 (the Gilded Age)」の文学と政治の世界はそれだけでなくとも絡み合っていたが、生涯を通じてハウエルズは政界に交際範囲を保ち、その中で一定の影響力を持ち続けた。ヘイは19世紀末から20世紀初頭にかけて影響力を強めていった文人政治家だが、ハウエルズとの交遊は死ぬまで続いた。ヘイがRutherford B. Hayes (第19代大統領。在位1877-81年)と政治的トラブルを起こした時にハウエルズはその解決に手を差し伸べて、ヘイが1879年にヘイズ政権で国務次官補に就任することに道を開いている。ヘイズ大統領が妻Elinorの従兄であることを十分に利用したのである。

1860年のボストン行きでの振る舞いも考えてみればいかにもハウエルズらしいものだった。このとき、ハウエルズは「誰よりも最初に会う作家はJames Russell Lowellだと心に決めていた。この決意は文学上の好みに基づいて固められたものではなく、ローウェルが『アトランティック・マンスリー』誌の編集長であり、それゆえ、ボストンの文化界で屈指の権威者だったからだ」⁽⁶⁾。ローウェル編集長の下、ニュー・イングランド文学界で(ということは「全米で」というのに等しい)威光をはなっていた『アトランティック・マンスリー』に4篇の詩を掲載された若き文学者の賭けであり、同時に将来に向けた布石だった。『アトランティック・マンスリー』編集部に招かれたのは、前述したように、ベニス領事帰任

後わずか1年のことで、5年後には編集長に就任している。こうした政治的意図と野心に裏づけられた行動はハウエルズの生涯を貫いている。

ハウエルズはよくある孤高の作家、芸術家といったロマンティックな概念には似合わない、かなり世俗の人間である。だが、ハウエルズが権力に接近し、この時代のアメリカ文学の中で頭角を現したとしても、ハウエルズが南北戦争後のアメリカ社会のたどった道に疑いを抱いていたという事実を変えることはない。「金ピカ時代」とはマーク・トウェインが友人の小説家Charles D. Warnerと共作した小説*The Gilded Age* (1873)に由来するもので、アメリカ史において1865年に終わった南北戦争から90年代頃までの四半世紀のアメリカ社会を呼称したものだ。農業中心だったアメリカが工業化、産業化の傾向を強め、物質的には空前の繁栄を示し、人々が一攫千金の夢にかられて、ドル獲得に狂奔した時代だった。だが、その反面、経済の急成長のひずみとして、政財界が癒着し、政治は極度に腐敗し、社会不正、道徳の墮落は社会のすべての階層まで及んだ。アメリカ史上まれに見る繁栄と腐敗とが背中合わせに出現した時代であった。

ところで、19世紀のアメリカで作家を志すとはどういうことだったのだろうか。Eric J. Sundquistの指摘を待つまでもなく、この時代のヒーローは資本家や実業家、発明家であって、小説家ではなかった⁽⁷⁾。ヘンリー・ジェームズは1871年に、Nathaniel Hawthorneの評伝を書いて、小説に必要な複雑な人間関係と社会的環境のない文学不毛の地アメリカで傑作を書き上げた先達に対してオマー・ジュを捧げると同時に、自らの文学的自負を明らかにしているが、その中でホーソン

が作家になろうとしたことの社会的意味を述べている。ホーソンを出しにしてほとんど自分自身の決意と境遇を語っているように読める箇所である。

[ホーソン]は文学にたいする関心がまだもっと低かった社会で、文学に専念しようとした。「実務について」いないということは、今日に至るまで、合衆国ではかなり不快な思いをすることだと言っても言い過ぎではない。いわゆる実務的階級に属さない生涯に入ろうとする青年、要するに町の商業地区に、ドアにその名をペンキで書き入れた事務所をもたない青年は、社会組織の中で限られた地位しか占めない。これという止まり木がないのである。

作家になり、「実務について」いない，“not in ‘business’”であることは、社会的に周辺的な存在と化してしまうおそれがあった。ただ、そのことが必ずしも作家が二級市民として侮蔑の対象になるわけではない、とジェームズは続ける。「[実務につかず、文学を志す青年]は横目で見られることはない。彼は怠け者と思われはしない。アメリカの社会では、文学や芸術は常にきわめて高い尊敬を受けてきた」⁽⁸⁾。

そういえば、ハウエルズが首尾よく受け入れられた1860年代ボストンの文学界の名だたる有力者の中にペンのみで自立している作家・詩人はほとんどいなかった。その大半が、ボストン・ブラーミンと呼ばれたNew Englandでも名家の出身で、先祖から受け継いだ富で暮らす富裕階級に属する人々で、「実務について」いる必要がそもそもなかった。名家の出身でも詩人ローウェルのように、『アトランティック・マンズリー』の編集に携わりながらも、ハーバード大学近代語教授を務め、社会的な「とまり木」を確保している文学者もい

た。

小説を執筆しながら、『アトランティック・マンズリー』の編集長していたハウエルズはローウェルら先行者と同様に、良き文学の守護者を自任して、読者が共有する伝統的な価値を擁護し育むことに努めたが、Amy Kaplanによれば、この時期、出版界の成長と合理が実務家として編集の仕事をする新しい世代編集者を生み出して、そうした「洗練された読者」がつくる知的共同体と関わるというより、積極的なマーケット技術を駆使した経営によって自分たちの製品として雑誌を編集し、読者を獲得するようになっていた。その点、編集者としてのハウエルズは転換点にいて、伝統の保持と同時に、「教育者として、また事情通の案内者として、教養ある読者の視野を広げて民主的な展望をあたえようとした」⁽⁹⁾。ニュー・イングランドの読者にマーク・トウェインをはじめとする西部や南部の作家を紹介し、若手の作家を登用した。これがハウエルズにとっての「止まり木」、社会的責務となったのである。

ハウエルズが編集者と作家の二足のわらじを脱いで、作家業に専念しようとしたのは1880代のはじめのことで、この時代以降、人口の都市集中が生んだ読者層の増加と技術の進歩によって新聞・雑誌はもちろん、書籍の生産と消費に繁栄をもたらしていた。アメリカの出版社が出版する書籍は1880年に2,076タイトルだったが、1900年には6,356に上った。小説の出版もこの時期に大きく増加して、1880年に292だったものが、1900年には616タイトルが出版されて⁽¹⁰⁾、市場における小説の重要性が増していった。

しかし、小説というものは様々な形式をとることができ、読者も多様な層にわたるため、市場の開拓と読者の獲得に配慮する必要があった。大衆小説や女性向けの教訓臭のある感傷的な小説以外

の小説にも市場が存在するようになったが、ハウエルズの書くリアリズムの小説は彼が荒唐無稽と断じた大衆小説やロマンス小説ほど市場で力がなかった。ハウエルズが新たな契約を結んだ *Harper's Monthly* 誌に 1886 年から 91 年まで寄稿したコラム “Editor's Study” がリアリズム擁護のための戦場となった。そして、いかにもハウエルズらしいのだが、この闘争は職業作家としての社会的責務、文学者としての「止まり木」を兼ねていた。アメリカの作家は人生の微笑ましい側面に目をむけるべきだ、なぜならそうした面の方が「よりアメリカ的だから」⁽¹¹⁾ として、アメリカというものに対するあけすけな満足感を表す一方で、次のような社会に対する不安感を漂わすときもある。

尊敬する小説家が人生のある種の面を扱おうとするのなら、真剣に取り組んでいることに対して疑う余地のない証しを示すよう人々は求めている。また、科学的な態度を望んでいる。小説家はもはや娯楽という場だけで受け入れられることは期待できない。彼は医師や聖職者なみの崇高な職務をひきうけるのであって、そのような専門職を拘束している厳粛な掟に従うことが期待されているのだ。彼は自分たちを裏切ったり、自分たちが寄せている信頼を粗末に扱ったりはしないと固く決心していると人々は考えている⁽¹²⁾。

専門職にある作家を対象にした「尊敬」とか「信頼」といった言葉は、作品が読まれるかどうかというよりも、作家自身が読者に受け入れられるかどうかに関心があることを示しているが、そのことに対する不安感が漂っている。専門家としての作家の文化的指導を受けつけられないかも知れない読者が大量に存在するとすれば、作家の役割を制限

することになり、それは社会的役割の棄損につながるからだ。カプランは、アメリカのリアリズムは「戦争、闘争、作戦行動といった戦闘的な言辞の中から現われ、ウィリアム・ディーン・ハウエルズは突撃隊長として登場する」と指摘しているが⁽¹³⁾、そうした攻撃的な姿勢はこの不安に根差している。作家自身が大きく変容している社会と折り合いをつけることができないまま、自らの在り方を見失いかけていることを示している。

ハウエルズが執拗にリアリズム擁護の論陣を張っている間にアメリカ社会の急激な変化が生み出した矛盾は抜き差しならないものになり、階級闘争の様相を呈してくる。産業資本家たちは自らの目的を達成するためには暴力に訴え、政府は資本家側に立って進んで介入することで対応した。中でも 1886 年のヘイ・マーケット事件はアメリカに階級の対立があり、そうした対立を取り除くためには私心のない介入をする必要があることをハウエルズに痛感させた。1886 年 5 月 4 日、シカゴで労働時間 8 時間制確立のために開催されていた労働組合の集会を警官隊が解散させようとしていたとき、爆弾が破裂し、1 名が死亡、6 人が負傷した。シカゴ警察はすぐさま 7 名のドイツ系のアナーキストを逮捕し、4 名が 1887 年秋に処刑されたという事件である。ハウエルズは判決が出るとすぐさま減刑を嘆願する手紙を送り、文章を発表した。アナーキストたちの政治目標を支持していたわけではなかったが、被告たちがアメリカ合衆国の法制度の下で公平な扱いを受けていないことに義憤を感じたからだった。ある友人に送った書簡に、「事實は、この者たちは共同謀議で起訴されるべきなのに、殺人で有罪になっているのです」⁽¹⁴⁾ という箇所があるが、裁判制度が公平でないとすれば、何らかの形でそれを是正する手段を取らなければならない、というのがハウエルズの

認識だった。この事件の結果はアメリカの生活が本質的には良いものであるとしていたハウエルズの確信が大きく揺らいだことだった。

僕自身「アメリカ」に対して気分が良くない。論理的にはこれは馬鹿げたことこの上ないように思えるが、アメリカがもっと好きにさせてくれないので、僕は好きになれないのだ。[中略] 50年来、「文明」というものと文明には最終的にうまくやる力があると気楽に満足していたけれど、今では文明が疎ましくて仕方がない。一度本当の平等を元にまき直しをしなければ、文明は最終的にはダメになってしまうように感じている⁽¹⁵⁾。

作家の社会的責務を確立するためのリアリズム擁護の論陣だったが、作家が小説の中に反映すべき現実が確信をもって把握できるものでなかったとしたらどうなるのであろうか。言語は自己完結した一つのシステムであり、差異から生まれる意味の体系はいかに操作しても現実というものを反映できないとするポストモダンによるリアリズム自体の脱構築はわきにおいたとしても、ハウエルズのリアリズム論も崩壊するしかないのだろうか。90年代に入ってもハウエルズは小説を書き続けるが、*A Hazard of New Fortunes* (1890) 以外、見るべき作品を残していないことの意味は大きい。

注

(1) 日本で最近刊行された3巻本のあるアメリカ文学史も同様である。南北戦争後の文学を扱った巻の「まえがき」で、「19世紀アメリカのリアリズム文学を代表する William Dean Howells, Mark Twain, Henry James」と言及した後、「アメリカ・リアリズム文学の成立」という冒頭の章で、「文学よりもっと広い範囲で当時起こりつつあった社会の動きや、外国からの影響が文学における

リアリズム運動を可能にした」と述べて、リアリズムをめぐる文学運動が存在したことを前提に記述を進めていく(渡辺利雄『講義 アメリカ文学史 — 東京大学文学部英文科講義録 第二巻』研究社, 2008年)。

- (2) マーク・トウェインは *Adventures of Huckleberry Finn* (1884), ヘンリー・ジェームズは *The Portrait of a Lady* (1881) を発表している。ウィリアム・D・ハウエルズの場合、異論があり得るが、*The Rise of Silas Lapham* が1885年に刊行されている。
- (3) Cf. Leon Edel, *Henry James, The Master: 1901-1916* (Philadelphia: J. B. Lippincot, 1972), pp. 36-39.
- (4) 例えば、ハウエルズはつねづねリアリズム小説の「創始者」として Jane Austin をあげ、高く評価している。cf. *Criticism and Fiction and Other Essays by W. D. Howells*, ed. Clara M. Kirk and Rudolf Kirk (New York: New York University Press, 1959), p. 38. 一方、トウェインは激しい筆法でオースティンを批判している。ハウエルズの認識を知っているはずのトウェインが1901年に Howells に宛てた私信は象徴的で、「ジェーン・オースティンはまったく箸にも棒にもかかりません (Jane Austin is entirely impossible)。自然死させてしまったのが残念に思えてきます」という件がある。cf. *Mark Twain-Howells Letters: The Correspondence of Samuel L. Clemens and William Dean Howells, 1872-1910*, ed. Henry Nash Smith and William M. Gibson (Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1960), p. 396.
- (5) Howells の伝記の事実に関しては Kenneth Lynn, *William Dean Howells: An American Life* (New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1970), Edwin H. Cady が著した2巻本の評伝, *The Road to Realism* と *The Realist at War* (Syracuse: Syracuse University Press, 1956, 1958), Michael Anesko, *Letters, Fictions, Lives: Henry James and William Dean Howells* (New York: Oxford University Press, 1997) を参照している。
- (6) Lynn, *William Dean Howells*, p. 92.
- (7) Eric J. Sundquist, “The Introduction” to *American Realism: New Essays*, ed. Eric J. Sundquist (Baltimore: John Hopkins University Press, 1982), p. 5.
- (8) *Hawthorne* (1879), reprinted in Henry James,

- Literary Criticism: Essays on Literature, American Writers, English Writers*, ed. Leon Edel (New York: Library of America, 1984), p. 342. 工藤好美監修『ヘンリー・ジェームズ作品集8 評論・随筆』(国書刊行会, 1984)所収, 小宮敏三郎訳「ホーソーン」pp. 49-50. ジェームズはさらに、「そしてそれを業とする者たちは、他国におけるよりも安易な条件で受け入れられてきた」と述べて、アメリカ社会から作家たちに向けられる安易で大きな敬意を問題にしている。
- (9) Amy Kaplan, *The Social Construction of American Realism* (Chicago: the University of Chicago Press, 1988), p. 18.
- (10) John Tebbel, *A History of Book Publishing in the United States*, Vol. 2 (New York: R. R. Bowker, 1975), pp. 675-692.
- (11) *Criticism and Fiction*, p. 62.
- (12) *Criticism and Fiction*, p. 72.
- (13) Kaplan, *Social Construction*, p. 15.
- (14) William Dean Howells, *Selected Letters*, Vol. 3, ed. Robert C. Leiz *et al.* (Boston: Twayne, 1980), p. 198.
- (15) Anesko, *Letters, Fictions, Lives*, p. 272. ヘンリー・ジェームズに宛てた 1888 年 10 月 10 日の手紙。